みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

日本の近代製糸業とキリスト教精神

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杉本, 星子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001572

杉本良男編『キリスト教と文明化の人類学的研究』
国立民族学博物館調査報告　62:71-91(2006)

日本の近代製糸業とキリスト教精神

杉本　星子
京都文教大学人間学部

はじめに
1　生糸世界市場と日本の製糸業
2　在来製糸業地域におけるキリスト教の拡大
2.1　開港とキリスト教の布教
2.2　群馬における製糸業とキリスト教
2.3　京都南丹地方における製糸業とキリスト教
2.4　その他の在来製糸業地域におけるキリスト教の拡大
3　近代企業倫理としてのキリスト教精神の受容
3.1　富岡製糸場の工女たち
3.2　郡是にみるキリスト教教育
3.3　山形の羽前エキストラ格生産とキリスト教教育
4　キリスト教と報徳思想
4.1　報徳主義
4.2　波多野鶴吉と報徳主義
4.3　群馬の製糸家と報徳主義
4.4　会社宗教と企業倫理
5　工女教育を介した家庭思想の浸透
5.1　工女のための女子教育
5.2　郡是の家庭教育
5.3　碓氷社の家庭教育
5.4　「家庭」イデオロギーの浸透
結　び

はじめに

日本の近代化は製糸業から始まったといっても過言ではなかろう。明治初期の近代製糸業は，横浜からの生糸の海外輸出による養蚕地帯における民間製糸業の隆盛と，官営製糸工場の設立による技術革新によって発展した。同じころ，不平等条約のもとで西欧と対峙した人びとの亡国への危機感と近代化への希求を背景に，開港場と商取引のある地方の旧城下町やその周囲の農村で，旧士族や新産業に進出しつつあった中上層農民のあいだに，キリスト教が広まっていった[1)]。そのなかには，多くの製糸家やその家族，そして工女たちが含まれていた。

一方，官営模範工場として出発した富岡工場の創生期には，多くの旧士族が関与していたばかりでなく，士族の子女が工女として採用されていた工場は，そうした工女たちに欧米の最新の製糸技術と近代の労働倫理を習得させる新しい女子教育機関としての役割をも担っていた。富岡工場出身の工女たちは，その後，各地の製糸工場に教婦として招かれて工女教育に携わった。明治23年（1890年）に制定された民法は，習業者が未成年の場合には，読み書きと算術の学習時間を与えることを義務づけていた。その後，法案は施行延期となり廃案となった。しかし，日本各地の製糸工場では，それ以前か

ら，技術教育だけではなく教養としての工女教育が行われていた。明治30年頃には，諏訪郡でアメリカ向けの中下等糸を生産する製糸業と，長野県北部，東北南部，西日本など近代化に遅れをとった地域で優良糸を生産する製糸業とのあいだには，異なる製糸経営が発展していた。優等糸製糸工場は，糸繰り技術を熟練させるために長期の雇用と長期の修練期間を設け，製品の質を高めるために夜勤を廃止し，夜学による工女の教育システムを充実させていった。近代製糸業については，「女工哀史」といわれる悲惨な女性労働者の搾取をもたらした労働問題をめぐって，多くの議論がなされてきた。しかし，ここでは製糸工場での労働と教育をとおして，技術と教養と収入をもつプライドある工女を育てた近代製糸業のもう一つの側面にも注目したい。

本稿では，明治から大正期における近代製糸業とキリスト教の結びつきに焦点をあて，(1) 富国をめざす製糸家によるキリスト教の受容，(2) 企業倫理としてのキリスト教精神の受容，(3) キリスト教倫理から報徳思想への展開，(4) 工女教育をとおしたキリスト教的「家庭」思想の村落社会への浸透と，その家庭思想の儒教倫理への回収を取り上げ，近代日本におけるキリスト教精神の大衆的受容について考察する。

1　生糸世界市場と日本の製糸業

日本の絹織業は，16世紀半ばから17世紀初頭にかけて明の技術を導入し，西陣を中心に飛躍的に発展した。江戸時代，西陣の高級織物の原糸は，オランダ船や中国船によってもたらされる舶来糸に依存していた。やがて，幕府の銅貿易の衰退と1685年から実施された外国貿易制限令（貞享令），中国における生糸価格の上昇と輸出制限・禁止などによって，舶来生糸の輸入は減少した。

1713年，幕府は諸国に養蚕勧奨の触書をまわした。しかし，1717年頃まで，西陣に持ち込まれていた和糸（日本製生糸）は，美濃・近江・上州から少量あるのみであった。1720年（享保５）に丹後で縮緬生産が始まり，続いて1738年（元文３）に上州で紗綾生産が起きた。米沢藩をはじめ諸藩が，藩政改革の一環として養蚕業の振興政策をすすめた。こうして次第に地方の絹機業が盛んとなり，製糸業が各地に発達していった。

近世後期の生糸の主な生産地はおもに東日本であったが，「西の繭はよいが，東の繭は悪い」といわれていた。実際に，質量共に優れていたのは江州長浜（滋賀県）の浜糸と美濃の美濃糸（岐阜県）であった。次いで上州（群馬県）・武州（東京・埼玉・神奈川の一部）・奥州（福島・宮城・岩手・青森県）・越前（福井県）で，多くの生糸が生産された[2)]。日本では，江戸時代を通して手挽きが一般的な製糸技術であった。18世紀末に上州・奥州で座繰器械が発明されていたが，それが広く普及したのは横浜開港後である[3)]。

1859年，西欧列強に開国を迫られた幕府は，自由貿易を開始した。奇しくも1850年

代後半から1860年代にかけて，ヨーロッパとりわけフランスの絹織物市場が拡大し，生糸の国際価格は急上昇していた。それに乗じて，上州糸を中心とした和糸の輸出が拡大し，生糸は日本の最重要輸出品目となった。

明治３年（1870年）に，上州前橋に前橋藩営製糸所が設立され，明治５年（1872年）には，上州富岡に官営富岡製糸所，信州諏訪に小野組深山田製糸所が設立された。明治７年（1874年）には，上毛に水沼製糸所が設立され，ヨーロッパの器械製糸技術が導入された。1870年代，インド，中国，日本の生糸が欧州市場で激しく争った。やがて中国からフランスへの生糸輸出が急増し，品質の劣る日本製生糸の輸出は減少した。1880年代に入ると，フランスの不況によってヨーロッパ市場が縮小し，欧州向け生糸輸出は停滞した。一方，1870年代にはアメリカで，ヨーロッパから移住したイギリス系やフランス系の熟練労働者による絹織物業が発展し，大衆向けの消費需要を対象とした市場が拡大した。やがて日本はアメリカ向けの中下等糸[4]の生産を中心に，輸出を伸ばしていった。1884年（明治17年）には，アメリカへの輸出がフランスへの輸出を上回った。アメリカ向けの生糸の輸出拡大を担ったのは，長野県諏訪郡を中心とした信州の器械製糸業であった。諏訪では，出来高制の賃金制度が導入され，増産を目指して糸繰り工女たちを激しく競わせた。1880年代，アメリカの絹織物業で力織機の高速化が進展した。それによって，力織機にかけられる均質な糸が求められるようになった。諏訪の製糸家たちは，農民から繭を直接買い付け，繰糸から再繰糸まで一貫して行う大規模製糸工場へと移行することによってこれに対応し，世界的な大企業に成長していった[5]。

こうして，世界の生糸市場に供給されたアジアの生糸は，19世紀前半が主にインド系生糸，後半が中国系生糸，20世紀前半は日本系生糸という変遷をたどった[6]。とくに19世紀後半は，アジア産生糸が欧米市場へ大量に流入する一方で，ヨーロッパの器械製糸技術が東アジアへ移転したことによって，生糸の世界市場全体に大きな構造変化がおきた時代であった。日本の製糸業界もまた，国際市場に組み込まれるなかで再編された。近畿地方の在来製糸業は，主に京都を中心とした国内向けの生産を続けた。信州や桐生の器械製糸業は，アメリカの靴下製造を中心とした輸出向けの中等糸の需要に応じて発展した。やがて，上州の前橋や山形県の在来製糸業，後発地域の器械製糸業のなかに，輸出向けの上級糸に特化する製糸業者が現れた。こうして，国内製糸業の棲み分けが形成されていったのである。

2　在来製糸業地域におけるキリスト教の拡大

2.1　開港とキリスト教の布教

開国によって，長く禁じられてきたキリスト教の布教が再開された。養蚕地帯は，開

国後の生糸輸出をとおして横浜とつながり，蚕紙を買い付けに来たイタリア人やフランス人と直接接した。欧米に渡って製糸技術を学んだり，蚕種の直輸出を目指した者もあった。こうして，養蚕地帯の豪農や豊商のあいだにキリスト教を「文明の光」として受容し，地方産業の育成とそれによる富国を目指す人びとが増えていった[7)]。

一方，東北戦争で敗れた旧伊達藩の青年たちは，函館で再起をめざすなかでロシアの函館領事館付宣教師ニコライと出合い，ハリストス正教に新国家を支える精神を見いだした。彼らは国家を快復するためには人心の改造が必要であり，人心の改造は真正の宗教への信仰によってなされるべきであると考えた。このような国家再建への志のあり方は，ハリストス正教以外のキリスト教と出会った当時の青年たちの間にも共通していたといわれる。その頃，上州安中藩の新島七五三太は，アメリカへの密航を企てて函館にいた。彼はニコライに日本語を教え，また，ロシア病院の慈善活動をとおして人びとがキリスト教に敬意を抱いている状況を目のあたりにして，日本がロシアの植民地となることを危惧した。新島七五三太とは，のちにアメリカへ渡ってプロテスタントに入信し，帰国後，同志社大学を創立した新島襄である[8)]。

ハリストス正教は，旧諸藩士の青年たちを中心に，函館から東北一帯へと広まっていった。先に述べたように，日本の在来絹業の特徴の一つは，江戸時代，諸藩が養蚕業振興政策をとり生産を奨励したことによって，多くの下級士族や豪農や富商がそこに関与していたところにある。たとえば米沢藩では，文化文政までに養蚕製糸が農家の副業として定着するとともに，下級武士が中心的な機業家となって絹織物業が確立していた[9)]。さらに明治初期，諸藩は士族授産事業として製糸業に取り組んだ。宮城県登米地方では，ハリストス正教を信仰する半田卯内をはじめ，地方の名望家が製糸業を開設して，地方産業の育成と地域開発に力を尽くした。

2.2 群馬における製糸業とキリスト教

上州前橋では，藩主松平直克が藩士速水堅曹（後の富岡製糸場長）の進言によって，器械製糸を導入し生糸生産を向上することによる藩の増収をもって，士族の生活の再建を目指した。明治３年（1870年），前橋藩は，スイス領事ベルの支援をえてイタリアの製糸機械12台を入れ，外人技術者を雇用し，日本最初の洋式器械製糸工場を建設した。明治７年（1874年）の廃藩置県後，藩営製糸工場の創設に関わった旧藩士深澤雄象，速見堅曹，松本源五郎らは，製糸会社一番組を始めた。

明治10年（1877年），「改良座繰」と称し，一番組や勢多郡水沼村の星野長太郎の亘瀬組など地域の幕末以来の製糸家の組が集まって，それぞれが生産した生糸の共同販売を始め，翌1878年に精糸原社を設立した。前橋の精糸原社桐華組の頭取深澤雄象は，1878年（明治11年）にハリストス正教の洗礼をうけ，製糸業のかたわら積極的に布教活動をおこなった。深澤雄象の娘婿，深澤利重はハリストス正教の洗礼を受け，養蚕業

を研究し，製糸業を経営するとともに，明治21年（1888年）に英語女学校（後の共愛学園）を創設し，また製糸工女たちにキリスト教を伝道した。

明治13年（1880年）12月に，貧しい製糸農家を搾取することによって利益を得ている蚕糸業者や生糸問屋を批判して，運営の「衆同共有」，利益の「衆同協力」，会員の「衆同協合」をめざして上毛に上毛繭糸改良会社が創設された。各農家の座繰器で繰りとられた糸は村の共同の組合再繰場に持ち寄られ，それぞれの糸質ごとに均質の糸の束にされてから，村の共同組合の連合体である上毛繭糸改良会社の本社に送られ，そこから横浜の生糸売り込み問屋に共同出荷するシステムがつくられた[10]。上毛繭糸改良会社取締役の星野耕作もまた，ハリストス正教徒であった。

明治13年（1880年），前橋に誕生した民権結社上野連合会の発起人は，宮崎有敬，星野長太郎，深澤雄象らで，会員は32名，そのうち蚕糸業者と生糸商人が17名を占めていた。この上州の民権運動の中心となった人々と，明治16年（1883年）の自由党解散に象徴される民権運動の挫折以後に盛んになった廃娼運動や禁酒運動といった社会改革運動の担い手と，そしてキリスト教信者は，かなり重層していた。こうした人びとの多くが在地の有力地主層の出身であり，彼らのあいだには主義思想だけでなく，家業や親戚関係をとおしたネットワークが形成されていた[11]。上州における広範な村を結ぶ製糸組合運動は，このような地域の社会関係のうえに展開した。そしてキリスト教もまた，このネットワークを介して，製糸工場の労働者や養蚕農家のあいだに拡がっていったのである。

深澤雄象や星野長太郎とともに民権結社上野連合会の創設に関わった萩原鐐太郎は，家業の養蚕業に力を注ぎ，明治11年（1878年），西毛に精糸原社をモデルとして碓氷座繰精糸社の元組を設立した。彼は，「奮って神思を繭糸業に注ぎ旧習を株守せず（中略）我々幸福を共需」と述べ，キリスト教的な生活共同体精神を説いた[12]。明治12年（1879年），精糸社に糸を持ち込む組（自家製糸による生産単位）が碓氷郡各地に設立されて13組となり，安中市原に碓氷座繰精糸社の本社がおかれた。碓氷社は，明治30年代になると，碓氷郡を越えて県外に組織を広げるようになった[13]。

碓氷社二代目社長の宮口治郎は，アメリカから帰国した新島襄の演説に共鳴した有田屋当主湯浅治郎[14]などが中心となって創設した安中教会の信徒である。湯浅治郎も，明治19年（1886年）に国光社を結成して碓氷社に加入し，また生活に困る信徒のための共同養蚕所をつくるなど地域の製糸業の発展に尽くし，また廃娼運動にも献身していた。湯浅は同志社の創設に尽力し，その関係から海老名弾正らの牧師を上毛に招いて伝道にあたらせた。湯浅の義弟が徳富蘇峰である。安中教会と碓氷社の関係は密接で，社員であり教会員であった者はかなりの数に上ったと推測されている。また，国光社や富岡製糸所の工女たちの受洗もあった。

湯浅治郎とともに高崎周辺や北毛でプロテスタントの伝導をした星野光多は，生糸商

星野宗七の息子である。彼は父宗七が横浜に出店した折に，そこで受洗した。星野一族の入信により，沼田教会が設立された。星野一族の銀二と精一は，明治23年（1890年）に星野製糸所を設立し，製糸所と教会からなる生活共同体結合を目指した。明治18年（1885年）に星野光多から洗礼を受けた木桧仙太郎は，明治32年（1899年）に三国製糸社を設立し，碓氷社三国組となった。また，吾妻の原町では，吾妻精糸社長の山口六平らにより吾妻教会が創設された[15)]。星野光多らのかなり強引な伝道活動もあって，明治19年（1886年）頃，上州ではプロテスタントとハリストス正教が信者の獲得をめぐって激しく競いあった[16)]。

2.3 京都南丹地方における製糸業とキリスト教

明治８年（1875年），新島襄により京都に同志社が創設された。明治10年頃から京都近郊でプロテスタントの伝道活動が始まり，明治19年（1886年）には丹波教会が設立された。丹波教会の信者には，山城の前田栄吉や園部の明田重次郎などの蚕糸業関係者がいた。その頃，京都府何鹿郡の養蚕業の第一人者であった梅原和助に薦めにより，波多野鶴吉が京都府の蚕糸組合に入った。東日本の製糸業が明治初期から技術開発を進めていたのに対して，西日本とりわけ京都近郊の製糸業は，長く西陣向けの手挽糸生産に留まり，品質の悪い生糸の生産地といわれるようになっていた。波多野は，蚕糸組合の組合長となり，蚕糸業の振興をめざした。彼は製糸工場を設立するにあたって，綾部で天蚕飼育をしていた田中敬造のもとを訪ねた。また技術習得のために新庄倉之助と高倉平兵衛を，前橋の深澤雄象のもとに送った。田中敬造は，天蚕飼育調査のために派遣された四国伊予で押川方義の演説を聴いて感銘し，丹波教会で洗礼を受けていた。新庄倉之助と高倉平兵衛は深澤のもとでキリスト教の影響を受けて帰郷した。波多野鶴吉は明治22年（1889年），器械製糸工場羽室組を設立した。波多野の尽力もあって，同年，何鹿郡中上林に協同搗枠所が，翌明治23年（1890年）には綾部にも協同搗枠所（有光社）が創設された。南丹地方の製糸業は，こうして座繰りを経ずに手挽きから一気に器械製糸に移行した。明治23年，波多野鶴吉は牧師留岡幸助から洗礼を受けた[17)]。明治29年，波多野は，社名を郡是製糸とした。均質で良質な糸をつくるためには，同一の優良繭が必要である。郡是はそれを養蚕農家と特約関係を結ぶことによって達成した。特約農家はまた労働者である工女たちの供給源でもあった。波多野は工女を対象とした社内教育や，契約養蚕農家との繋がりをとおして，南丹地方の農村におけるキリスト教の布教に努めた。

2.4 その他の在来製糸業地域におけるキリスト教の拡大

明治30年代，キリスト教博愛主義は，全国の養蚕地帯や製糸業地帯において盛んとなった[18)]。それを率いていたのが，新島襄，内村鑑三，柏木義円といった群馬の思想家

たちであり，彼らと結びついた徳富蘆花ら熊本バンド[19]の青年たちであった。

明治６年（1873年）に福島県に創設された二本松製糸会社は，富岡製糸場を創設した速水堅曹を招聘し，二本松城址を払い下げて建設された日本最初の私企業による製糸工場であった。明治18年（1885年）に，山田脩が二本松製糸工場の後を次いで器械製糸工場双松館を設立した。双松館は二本松教会と結びつき，工女たちの指導のために東京聖書学院に学んだ教師を雇用した。愛媛県でも，家業の生糸商を継ぎ製糸業を営む宇和島地方の実業家高畠亀太郎が，明治38年（1905年）に洗礼を受け，熱心なクリスチャンとして南伊予の教会に貢献していた。また，江東鐘ヶ淵紡績の敷地にも教会が建てられ，熱心な活動をしていたと伝えられる[20]。

在来製糸業地域におけるキリスト教拡大の背景には，先に述べた上州の製糸業とキリスト教の結びつきに見られたような，当時の製糸家と製糸業の経営形態を特徴づける以下のような諸条件の重層性が指摘できると考えられる。①大正12年（1923年）の関東大震災まで横浜にほぼ限定されていた生糸積出港と地方を結ぶ流通ネットワークとそれを通した外国文化の流入，②自由民権運動や廃娼運動による地方上層青年間の政治的同士関係の構築，③近代製糸技術の習得を介した製糸企業家や技術者の情報ネットワークの形成，④生糸の品質向上を目指した製糸工場と契約養蚕農家との緊密な結びつきである。

一方，もともと綿打ちを主とする地域であった信州では，開港後に上州から座繰器を導入したことによって製糸業が拡がった。やがて「諏訪式」とよばれる座繰技術と水車による動力を組みあわせた簡易器械製糸がおこなわれるようになった。そして1870年代ごろから，次第に機械化の程度を増大しながら，上質ではないが均質な糸を大量に供給することによって，製糸業の一大中心地に成長していった[21]。信州においては，片倉製糸をはじめとする大製糸家とキリスト教の結びつきは，それほど強くなかったようである。とはいえ，多くの青年が，廃娼運動や禁酒会をとおしてキリスト教に接近した。その一人に，蚕種製造業者で，『秋繭飼育法』の著者である相馬愛蔵がいた。相馬は木村尚江らとともに演説会や討論会の弁士として活躍した。彼はのちに，押川方義によって洗礼を受けた妻良（黒光）とともに上京し，パン屋として再出発して中村屋の経営に成功した。相馬愛蔵は，キリスト教を一つの精神運動として取り入れ，主人と店員女中が同じ食事をするなど，奉公人を平等にあつかう商店経営理念を実践した[22]。

一方，このような地方上層部へのキリスト教の浸透とは別に，明治末期から昭和初年にかけて製糸工場の工女たちのあいだに，キリスト教信者が増加した。とくにキリスト教信者が多かったのは伊那地方と諏訪地方である[23]。カナダの宣教師コーリーによって設立された聖バルナバ教会は，過酷な労働条件の下に働く女性労働者のためにあえて岡谷を教会建設の地として選んだという。女工たちは労働の合間に，足繁く教会に通った。聖バルナバ教会は，「毎日腰掛けて仕事をしているので，教会に来たときくらいは

畳に座りたい」という女工たちの希望で礼拝堂内部を畳敷きにしたといわれ，現在もそれが残っている[24)]。

3　近代企業倫理としてのキリスト教精神の受容

3.1　富岡製糸場の工女たち

明治期の在来製糸業地域において受容されたキリスト教は，どのような特徴をもっていたのであろうか。それを製糸工場の工女教育から考察してみたい。

明治期の近代製糸工場のモデルは，いうまでもなく富岡製糸場であった。明治政府は，明治３年（1870年），官営工場建設のために，横浜の生糸商社の紹介によりフランス人技師ポール・ブリューナの雇用を決めた。明治５年（1972年），機械設備購入のためにフランスに戻っていたブリューナが，新妻とともにフランス人教婦や機械工をつれて帰国した。建設工事は責任者の尾高惇忠を中心に順調に進んだが，「工女」と呼ばれる女子糸繰り工の募集は難航した。政府は「製糸に志ある者は士民を論ぜず」工女を募集するという論告を，近隣５県に，次いで北陸道10県に出し，「フランス人の飲むワインは工女の血である」という巷の妄説を批判した。尾崎は娘勇を入所させ，各地の有力者を説得してその子弟を集めた[25)]。かくて最初に率先して工女の募集に応じたのは士族の娘たちであった。富岡工場での生活を記した『富岡日記』『富岡後記』の著者和田英もまた旧松代藩士横田数馬の娘で，父が松代に設立を予定していた六工社の指導者としての技術を身につけるために応募したのであった。

こうして全国から集められた工女たちは，５年間，規則的な寮生活をおくりながら，婦人としての礼儀をまもりつつ，フランス人教婦を師として最先端の糸繰り技術を伝習することになった。工女たちは，「国の業」が自分たちの双肩にかかっているという堅い決意で故郷を出発し，煉瓦造りの壮大な建物で，誇りをもって働いた。寮生活は20人一組で部屋長がおかれ，部屋長には技術力の高い一等工女が選ばれた。和田英は１年の伝習期間を経て，一等工女としての技術と「富岡風」を身につけて帰郷した。『富岡日記』を分析した山崎は，英の語る「富岡風」とは原理に忠実でよい製品をつくることであったとして，そこに経済第一主義により粗製濫造する企業家精神とは一線を画し，日本の生糸の信用のために品質を第一等にしなければならないと励む儒教的な国家建設の志を読みとっている[26)]。製糸工場の工女たちは，したがって下級単純労働者としての女工ではない。実際，「官営模範工場」として設立された富岡製糸場の工女たちは，故郷に戻り，各地の近代製糸工場で指導的な役割を果たすことになった。

3.2　郡是にみるキリスト教教育

郡是（グンゼ）を創設した波多野鶴吉は，現業部門（工場）に現業長，教師，教婦，

検査工女（助教婦）をおいた。現業長には，第一回の養蚕伝習所で学んだあと梅原製糸場や有光社に勤め，その後，京都府加佐郡の養蚕巡回教師をしていた片山金太郎を招いた。教師には，波多野の指示により群馬で養蚕製糸を学んだ技術者，新庄倉之助が就いた。彼は，綾部製糸講習所の講師や何鹿郡の製糸巡回教師を兼務していた。教婦の国松いまは，官営富岡製糸場や京都川端製糸の出身と伝えられており，川端製糸の教婦を兼務していた。教婦の地位は高く，給料は年額120円で支配人と同額であった。工女の募集に当たっては，すでに他の製糸場において修業した経験者を甲種工女，新たに製糸に従事する者を乙種工女と区別し，経験者を優遇した。さらに創業に先立って，新工女養成所を開き，技術の向上を目指した。

明治時代の製糸業は「人力七分に器械三分」といわれ，製造された生糸の品質や効率は工女の技術力や精神力に負うところが多かった。そのため，工女を養成し生産作業を管理統率する教婦は繰糸実務の要であり，優秀な教婦の確保が求められていた。波多野は，明治31年（1898年），教婦の国松いまを農商務省蚕業講習所（現東京農工大学）に派遣した。同じ年，京都の蚕業講習所に製糸科が設置されると，製糸工女の田中かつと福山京を入所させ，修了後は検査工女に任命した。その後も工女の派遣は毎年続いた。創業直後から各種の品評会や万国博覧会に生糸を出品し，工女にも技術を競わせ模範工女に名誉と高賃金をあたえるなかで，郡是は優等糸の製糸工場としての地位を確立していった[27]。

波多野は，良質な繭を購入するために村をまわったときの，繭の良否が人格にともなっているという実体験を踏まえて，聖書の「善き樹は善き果を結び，悪しき樹は悪しき果を結べり」という教えをもって「良い糸」をひく「善い人」の集団を作り維持することに取り組んだ。会社の経営方針は，「優美なる生糸」の生産であり，「会社の精神は愛なり」とされた。現業部の教師であった新庄は工場管理法に関して，主人の利益は職工の利益，管理者との間の平等・自由・平和，工場の衛生と人の気品と良い製品は大いに関係することなどを述べている[28]。キリスト教精神は，こうして近代企業倫理として企業経営に組み込まれたのである。

郡是では，明治30年（1897年）に「夜学」を開始し，明治36年（1903年）からキリスト教の指導も導入した。工女たちは厳格な規則を定めた全寮制のもとに生活し，働くとともに，夜学で養蚕法，裁縫，修身，読書，算術を学んだ。1909年（明治42年）元旦，波多野は，道徳修養のために家庭部を新設し，新工女をすぐに職場に配属せず，数ヶ月の家庭教育を施しながら製糸教育をするという構想を打ちだした。同年，教育部が設置された。教育部は工女のみならず，社長以下会社全体を教育し，全体を融和して「小天国」を形成するという理想を掲げていた。教育部長として，仙台の東北学院で押川方義のもとに学び，前橋共愛女学校長を勤めた川合信水が招かれた。教育部のもとに，修養会，講演会，懇話会，青年会，女子会，婦人会が置かれた。とくに力が入れられたのは

女学会で，道徳，知識，技芸，健康を兼備した女子を育成することを目的とし，一般工女に，修身，国語，家事，整理，算術，習字，唱歌，裁縫，茶の湯，生花，体操を教えた。教育時間は，休日のうちの半日と冬季の夜間で，六年間のコースであった[29]。郡是において労働と「修道教育」は一つの事業の表裏とされた。「表から見れば工場，裏から見れば学校」において工女を厳しく仕付けることによって「郡是人」が養成されたのである[30]。

波多野は，「養蚕家は社長の愛子なり」という郡是精神を強調した。彼は，蚕の改良品種の普及につとめ，明治31年頃からは，先に述べたように良質な繭売買の長期安定的契約関係のため，養蚕農家からなる養蚕組合と特約取引の契約を結ぶ正量取引を始めた。彼は日露戦争（1907-8年・明治37-8年）後，牧師とともに何鹿郡の農村をまわり始めた。牧師はキリストの福音を語り，波多野は養蚕業を薦めた。波多野は農村を，精神的にも物質的にも豊かにすることを目指していた[31]。こうした活動をとおして，近隣の養蚕農家に「郡是人」つまり郡是一家という意識が拡大するとともに，そうした農家から多くの工女が郡是に採用された。

3.3 山形の羽前エキストラ格生産とキリスト教教育

山形県置賜地方では，明治６年（1873年）に，富岡工場を視察した多勢亀五郎が設立した多勢組が，煮繰分業と沈繰法（沈めた繭から糸を繰る技術）を採用して，羽前エキストラ格とよばれる良質糸を生産した。製糸家は，優等糸を大量に規格をそろえるために，近隣の農家と蚕種統一などのために特約飼育契約を結んでいた。松岡製糸の経営方針は一種の士族精神主義で，士族の協同的扶助と教育的役割を担った地域の工場という性格を持っていた。工女は近隣地方から募集され，寄宿舎を設けて教婦や新人養成工を訓練し，寄宿制度と教育制度の整った温情主義的な訓練による工場と工女の信頼関係のもとで，「伝習工女」契約期間と合わせて十年にわたる長期雇用体制がとられた。この地方の熟練した工女の給与は年季奉公よりはるかに有利であり，製糸業が盛んな頃は，農家から女工を三人通わせれば蔵が建つといわれたほどであった[32]。山形県の製糸業史をまとめた森は，フランス向けの極上糸の生産のために，女工の長期雇用と熟練を土台とした経営と労務管理がなされ，さらにそれが購繭事情を介して特約養蚕農民との関係に及んでゆくことにより，いわゆる女工哀史とは別の「もう一つの製糸業史」が形成されていたことを論じている[33]。

明治末，片倉工場をはじめ信州の製糸資本が，いっせいに県外に進出を始めた。この頃，すでに優等糸製糸家として知られていた郡是が，羽前エキストラの製法に関心を寄せ，工女と技師を綾部に招いて研修をさせた。当時，置賜地方の養蚕業は，アメリカの生糸価格の上下に左右され製糸家に買いたたかれて苦況にあり，明治36年（1903年）には，この地方の器械製糸の創業者であった川村利兵衛の没後，経営不振に陥っていた

羽陽館が閉鎖された。こうしたなかで，地域の若者たちが郡是の工場誘致運動をおこない，大正９年（1920年），郡是・長井工場が発足した。

郡是・長井工場は，社内教育をとおして郡是のキリスト教精神を全職員に徹底したことによって，地域の工女イメージを一新した。郡是の工女たちは，祭りや「あやめ見学」などの行事で外出するときにも制服を着て整然と行列をし，「郡是女学校」ともいわれたという。郡是・長井工場の工女は，優良企業に勤めているというプライドをもっていた。工女の家族には，定期的な「父兄会」によって会社の方針や実情が伝えられた。とはいえ，工女たちのなかにキリスト教を心から信仰した人はごくわずかであったという。多くの人は裁縫や料理，躾が働きながら身につくことを喜び，親もまた郡是の教育を「おけいこごと」とみていた。郡是のキリスト教友愛精神は，宗教というよりむしろ礼儀として受容され，だからこそ家族ぐるみの郡是化が育くまれたといわれる[34]。

4　キリスト教と報徳思想

4.1　報徳主義

製糸家とキリスト教の結びつきは，日露戦争の可否をめぐる議論のなかで起きた内村鑑三不敬事件を契機に，微妙な変化をとげていった。国家主義に対する姿勢を問われた製糸家たちは，キリスト教への信仰を保持しつつ，愛国心を表明するようになる。1880年代後半，農村の窮乏を克服する方法として報徳主義が見直された。報徳思想は全国に拡大した。各地の製糸家のあいだでも，多くの者が報徳思想に傾倒した。報徳思想とは，江戸後期の農政家二宮尊徳が広めた経済と道徳の融和を訴える実践的な経済学説である。神道，仏教，儒教を，究極的には一つに至る異なる道に過ぎないと位置づける。報徳思想では，私欲に覆われない道心にそった心の状態を誠とよび，儒教でいう徳や仁に等しいものとして重視し，報徳四綱領の「至誠，勤労，分度，推譲」を実践することによって，徳が徳によって報われ，物質的にも精神的にも豊かに暮らすことができるとする。

日露戦争の講和が結ばれた明治38年（1905年）が二宮尊徳の没後五十年にあたることから，この年，官僚，教育家，企業家によって「報徳会」が創設された。そして，報徳思想の中心である報徳社の本社が，静岡県掛川市におかれた。企業家は，報徳の教えを，帝国日本を取り巻く競争に勝利するために農村復興に留まらず商工業他あらゆる産業に適用できると理解し，企業経営に援用した。とりわけ勤労の価値を強調する報徳思想と経営家族主義を併せて労務管理に導入することにより，社員の福利厚生の整備と労働者の倫理教育を充実させ，頻発する労働争議に対処することを期待した。さらに，報徳の教えは，「天徳，皇徳，親徳一切衆徳に報いること」と解釈されることによって，国民道徳となった[35]。

4.2 波多野鶴吉と報徳主義

綾部地方の牧師留岡幸助は，家庭学校を創立して少年の感化教育に努めながら，内務省嘱託として地方の改良事業に従事するなかで，静岡県で報徳社が地方自治におよぼす影響を調査した。その後，報徳研究に熱中し，その普及に努めた。物質よりも精神，経済よりも道徳という考え方に基づき，「農業の生命力」の堅持による農村振興を目指していた郡是の波多野鶴吉は，留岡を介して報徳教を知った。

波多野は，二宮尊徳が唱えた「売ってよろこび買うてよろこぶ」という言葉や，報徳主義の「至誠，勤労，分度，推護」という四徳を事業と結びつけて理解した[36]。そして，「報徳とは人間の小徳をもって天の大徳に応えること，至誠はすべての基礎であり，これなしに事業の永続なく，職工と勤労をともにし，分度は倹約であり，推護は株主への配当，従業員への賞与や教育，社会還元などを指す」として，報徳主義の実践を説いた[37]。

大正４年（1915年），郡是では以下のような社訓が制定された[38]。

神＝至誠 —— 信仰 —— 信頼，献身，合一，向上
修養 —— 身体，道徳，知識，勇気，情感，心霊
研究 —— 専門学，専門業
勤労 —— 忠実，秩序，敏活，忍耐，喜楽
愛敬 —— 神，聖賢，自己，他人，業務，国家，衆生，万物

さらに翌年，以下の文が付け加えられた。

誠を元として
① 完全なる天夫を信じ
② 完全なる人格を養い
③ 完全なる勤労を尽くし
④ 完全なる貢献を為す

この社訓のうちに，キリスト教倫理と報徳思想の融合を読みとることができる。波多野が労働者に求めた貢献の対象は，神と，そして神の共同体としての企業とともに，国家であった。

4.3 群馬の製糸家と報徳主義

群馬県の製糸家白石実太郎もまた報徳の精神に影響を受けたクリスチャンの一人である。彼は，明治28年（1895年）に静岡の報徳社を訪ね，明治31年（1898年）に，「郷党の強化，産業の振興」のために，茂木昭三郎や，後にキリスト教徒となる茂木佐重らとともに太田報徳会を創立して，副会長となった。太田報徳会の目的には「御詔勅を遵奉」することが掲げられた。白石は，報徳四綱領の推譲の精神を，人のために命を捨てたキリストの献身犠牲と結びつけ，「人にして神と生きる道」のために，この精神が必要だと述べた。そして，報徳教の四綱領を実践することにより，一家が繁栄し，一郷が繁栄

し，そして社会国家の平安と全人類の幸福が達せられるとして，その普及に努めた。白石は，報徳教は西欧の組合運動をモデルとする産業組合とは異なり，道徳に重点をおくことでそれに勝るものであると考えた。太田報徳会は，明治42年（1909年）に太田報徳社に改組され，初穂貯金，共同桑園，農具共同購入，農事研究などをおこなった。

白石は，明治45年（1912年）から大正７年（1918年）まで，碓氷社太田組の組合長として組合製糸にたずさわった。彼は座繰製糸から器械製糸への転換に関わり，農村の経済振興に努めた[39]。白石は，日露戦争後，上毛孤児院で吾妻教会の牧師片瀬清次に出会った。それまでクリスチャンは国賊であると考えていた白石は，彼らの活動が外国からの援助をうけない自給教会であることを知って教会に出入りするようになり，やがて洗礼を受けた。明治44年の太田報徳社の総会には，吾妻教会の片桐牧師が招かれている。

このようなキリスト教と報徳思想，そして忠君愛国を併せもった白石と思想的に対立したのが，精糸原社を設立した深澤雄象の娘婿，深澤利重であった。利重は，日露戦争にあたって非戦論者の立場にたった。利重は，木村尚江を後援して，前橋から総選挙に立候補させた。明治37年（1904年），木村尚江が吾妻教会でおこなった演説の最中に，不敬だと抗議の声をあげたのが白石であった[40]。

このように日露戦争後，キリスト教徒の製糸家たちは，一方で報徳思想とキリスト教の併合へ，他方で労働運動と結びついたキリスト教社会主義への傾倒へという，二つの方向に分岐していったと考えられる。

4.4 会社宗教と企業倫理

日本の企業文化の特徴の一つともいえる会社宗教は，江戸時代の家業繁盛や先祖祭司を中心とする「イエの宗教」や家訓からの連続性をもっている[41]。享保期以後，盛んに作られるようになった商家の家訓は，勤勉，倹約，孝行といった生活規範の遵守をイエの没落を防ぐという経営の問題と結びつける思想に基づくものであった[42]。しかし，日本最初の近代産業ともいえる製糸業において，近代的企業倫理としてキリスト教の精神が導入されたのは，こうした伝統的な道徳規範に基づいた「イエ」共同体を超克し，経済活動をとおした宗教的実践によって理想社会の実現を目指すものであった。二宮尊徳の報徳思想もまた，「一心」という言葉で，各人の心の「独立」を主張し，各人の徳によって支えられる社会の実現を目指していた[43]。このように，明治期の会社宗教は，家業の繁栄を願う伝統的な宗教意識とは一線を画し，近代的な個人から形成される企業共同体を宗教的な共同体として再編成するものだったのである。

明治初期におけるキリスト教と，明治中期における報徳思想は，いずれも日本という国家を意識し，富国を目指した企業活動の精神的支柱として広く受容された。それは，近代国家における企業の社会的責任という新しい企業倫理の誕生を意味していた。先に

述べたように郡是では，クリスチャンの製糸家によって社員教育に宗教が持ち込まれ，キリスト教精神に基づいた社訓がつくられ，毎朝の朝礼で訓示がなされた。キリスト教精神は「伝統的」なものでないがゆえに，教育され，語られなくてはならなかったのである。これに対して，諏訪で片倉兼太郎を総本家とする製糸業経営のための組織として形成された片倉同族団は，大正２年（1913年）の家憲草案に祖先伝来の伝統的な家風として敬神崇仏を記し，同族団の一致団結を氏神である諏訪大明神との結びつきをもって強調した[44]。キリスト教を企業精神と結びつけて受容する製糸家が拡大したことによって，キリスト教の信仰を受け入れなかった製糸家もまた，あらためて企業精神のよりどころを日本の伝統的な宗教観や倫理観に求めざるをえなかったといえるのかもしれない。

5　工女教育を介した家庭思想の浸透

5.1　工女のための女子教育

冒頭で述べたように，明治30年頃，諏訪郡でアメリカ向けの中下等糸を生産する製糸業と，長野県北部，南東北，西日本など近代化に遅れをとった地域で優良糸を生産する製糸業とのあいだには，異なる製糸経営が発展していた。アメリカ向けの中下等糸を生産していた製糸工場の雇用契約は，一般に１年以内の短期契約であったが，優等糸製糸工場は３年から５年にわたる雇用契約をして，糸繰り技術を熟練させるために長期の修練期間を設けていた。『女工哀史』の舞台となった諏訪郡の製糸地域では，一方で，女性労働者のおかれた厳しい労働環境が社会問題化するとともに，他方で，個人の稼ぎをもつ女性労働者の「夜遊び」や「風紀」の「紊乱」が告発されていた。長野県でも優等糸を生産していた信陽館や六工社は，明治22年（1889年）には，労働者の注意力低下や不十分な照明による製糸品位の低下を理由に夜業を止め，生産量を諏訪郡の製糸家の半分に抑えながらも，品質を保持することで安定した受容を確保しようとした。六工社では，すでに明治15年（1882年）から，夕食後に読み，書き，算術を教えていた。明治20年（1887年）には，この「夜学」の修了者に「修業証書」を出し，成績優秀者および皆勤者には「手拭い，髪掛，襟掛，反物の類」があたえられた。長谷川社もまた，明治22年（1889年）には，「人に妻たり人に母たるの道」を工女に教育していた。長谷川社は翌明治23年（1890年）に南信社と合同して長信社となったが，その塩倉製糸場でも，明治27年（1894年）に「国家の為め当人の為」に「夜学会」が設置された。19世紀末に，農商務省がおこなった労働調査に基づく『生糸職工事情』（1903年）は，優等糸の製糸工場においては，工場主と労働者の間に「主従的関係」があり，工場内に算術や裁縫の教授の場が設けられ，講師を招聘して婦得道徳の講話をし，それに関連する儀式を執り行うなど擬似学校的な教育が行われていることを報告している[45]。

5.2 郡是の家庭教育

前章で述べたように，郡是では明治20年（1887年）に夜学を開始し，寄宿舎に舎頭をおいて，躾教育を中心とした生活指導をおこなった。その中心にあった川野信水は明治42年（1909年）に教師として郡是に赴任するとすぐ，寄宿舎の名を「寮」とかえ，舎監は寮長，検査工女は教婦に改めた。川合は，すでに，東北学院で作文科を教えるとともに寄宿舎監を兼務した際に，寄宿生を「監督」するのではなく「教育」する考えをもつべきだと主張していた。そして前橋の共愛女学校に赴任してから，「舎監」を「主婦」とよび，「共愛寮」がホームであり，「主婦」はこのホームの主婦であると述べている。彼は，郡是でも，「寮舎は家庭のやうにして，寮長は母の如く，室長は姉のごとく，そこに住ふ女子は，娘の如く，妹の如く，互いに信じ，互いに愛して進むようにしたいと望んで居る，そうして一室を一家庭の如くし，その室長は，各々自分の家を持ったつもりになり，姉として妹の世話をし妹として姉を助け，一家を整えるつもりで一室を整え一室々々に家風をつくるやうにさせ…」と述べ，家庭（ホーム）の思想を掲げて生活改善を促した。

川合のホーム思想の発端は，明治23年（1890年），明治女学校の教頭をしていた巌本善治との出会いにあった[46]。巌本は，明治18年に『女学雑誌』を創刊し，男女平等論，婦女改良論，廃娼論，キリスト教的教育論，女子職業教育など，キリスト教教育に基づいた女子教育を論じた。彼は，キリスト教精神にもとづく「ホーム」という理想の家庭像を掲げて，家族の愛情にみちた「一家の和気団欒」の実現をめざす家庭教育を論じる女子教育者として知られていた[47]。

郡是における工女教育の推進は，食事の改善や，衛生状況の改善のための寮の建物の改築をともなった。初期の寮の中央廊下のプランは，大正から昭和の改築をへて，やがて北側片廊下で南面採光のプランとなる。こうした労働環境の改善によって，文字どおり明るい家庭としての寮生活の実現が目指された。「郡是に入ると人がよくなる」，「お嫁をもらうならば郡是の人をもらえ」というように，郡是の教育への評価は高かった。ただし，大正11年頃の調査によると，修道院的な清貧生活を理想とする教育規律の厳格さからか，「工女の定着率は勤続二年未満が半数を占める」とあり，必ずしも工女の定着率に結びついてはいなかったようである[48]。

5.3 碓氷社の家庭教育

碓氷社の萩原鐐太郎は，明治43年（1910年）の『社業談』で，「家庭工業」である製糸業を共同化する組合製糸を「家庭の幸福と製糸上の利益を併せ得る」ものとし，「真の快楽は家族団欒に超した者は無いのである。人間真の慰安所は家庭で無くてはならぬ」といい，「一家団らんの楽しみをなしつつ製糸すると言うのが当社独特の長所にして実に当社組織の根底」だと述べている[49]。したがって工場の教婦は，器械製糸技術の

先導者であり，女子を指導するために，技術上でも品格上でも女子の「模範」とならなくてはならないとする。女子は「一家の中心として一家の平和を保持」し「内助と云うて家に在りて夫を援け」，また「衛生の道を守り健康なる身体を以て健全なる子女を挙げ，之を教育する」という責任をもつというのが萩原の考えであった。従順は美徳ではあるが，しかし，ただ従来のようにただ人に頼って従順にしているだけでは「女子の本分は尽くされぬ」のであり，「夫婦は相互に助け助けられ，妻は克く夫を敬いて従順に使え，夫は妻を愛しみ，以て一心同体となって一家を経営」することで「一家団欒」の基礎となるとした。萩原は，碓氷社の女工は人に雇われ器械のように使役されるのではなく，「一家団欒の中心となっている人々」であり，「自己の地位を自覚して他人に云われなくとも自ら働き自ら良い糸を製することに努め，その技術に於いても，決して一般の女工に劣らぬと云う覚悟をもたねばならぬ」と述べている[50]。

5.4「家庭」イデオロギーの浸透

郡是や碓氷社の女子教育において強調された「家庭」は，キリスト教をとおして導入された近代的な家族概念であった。「家庭」という言葉自体，ホームという英語の翻訳語として明治時代につくられた新語といわれる。

明治４年（1871年）の戸籍法は，全国民を「戸」＝「家」に編入した。しかし，戸籍の上では「家」に属しながら，都市の給与生活者となって小家族の世帯を形成し，「家庭」生活を営む者も増えていった。こうして明治中期には，「家」家族と「家庭」家族の二重家族制度が形成された。そもそも「家庭」という言葉の流行は，廃娼運動と時期を同じくしている。「家庭」という言葉の創始者ともいわれる巌本善治は，キリスト教的な一夫一妻永続婚により夫と妻が協力して楽しい「ホーム」（室家）を築くことを奨励した。そして，「家庭」は，楽しく，明るく，健全であらねばならないとして，家族団らんの「愛」を強調した。「家庭」は，夫権によって束ねられ，夫婦関係を重視するものであって，父権によって束ねられ，親子関係を重視し，「孝」が規範となる「家」とは対照的なものとして位置づけられた[51]。

明治20年代，新聞雑誌には，「家庭欄」がつくられ，「家庭小説」が掲載された。『主婦の友』を初めとする女性誌が発刊され，「家庭」や「ホーム」という言葉を用いて新しい家族のあるべき姿が論じられ，その中心にある「主婦」としての女性像が生まれた[52]。それはまた，主婦としての女性や母としての女性の役割を論じるものでもあった。

徳富蘇峰は，1892年（明治25年）に『家庭雑誌』を発刊した。蘇峰は，夫権小家族である「家庭」を国家の単位とし，未来の少国民を育てる場と考えた。「家庭」は女性の領域となり，国民を育成する国家の基盤とみなされるようになった。こうして，「家庭」の家事を担う「主婦」という新しい女性像に，内助の功と小児教育の責務を全うす

る良妻賢母のイメージが重ねられていった。やがて明治も時代が下るにつれ，この新しい「家庭」家族像に儒教的な家族観が接ぎ木されていった[53]。

しかし，実際には「家庭」家族は，都市の中間層の一部において実現されているのみであった。明治36年（1903年）に『家庭の友』を発刊した羽仁もと子は，教養型主婦の主導による家庭の管理と団欒，家事の合理化，科学的育児を解いて，「女中の払底」を悩みとするような都市の中流以上の「婦人」の啓蒙に努めた[54]。こうした当時の状況を鑑みるなら，同じ頃，地方の製糸工場において，「家庭」という新しい家族像が強調されていたことの意味は大きいと考えられる。明治20年代から30年代を転機として，「家庭」イデオロギーは，人々の「国民」として社会に編入していく役割を担ったといわれる[55]。この時期，製糸工場は工女教育をとおして家庭の理想を全国に広め，家庭の担い手としての新しい女性を育成する教育装置となっていた。製糸工場における女子教育は，都市的な近代「家庭」像を，何千何万という工女の教育をとおして地方の中間層以下の人々のあいだに拡大させることによって，大衆の国民化に寄与したと考えられよう。

結　び

日本の近代化に先鞭をつけた製糸業は，国際的な市場競争を生き抜く企業経営を模索しながら，それを支える労働者を作りださなくてはならなかった。そうしたなかで，技術導入や貿易による西欧諸国との接触をとおして，キリスト教をとおしてプロテスタント的な労働倫理が導入された。この近代的な労働倫理を，寄宿舎制度を介して身体にたたき込まれたのが製糸工場の工女たちであった。ヨーロッパやインドの優良糸市場は，中国の上海で一化性蚕の繭から器械製糸された優良糸に独占されていたが，日本の製糸業は，二化性蚕（春秋蚕）の繭を器械製糸したアメリカ向け中等糸の輸出で成功した。しかし，日本の製糸業は，単なる安価な労働力の搾取による中等糸の大量生産に留まることなく，蚕の品種改良を重ねて一代雑種を普及させるとともに，製糸技術の向上によって上等糸市場にも進出して中国を凌駕し，やがて世界の生糸需要の三分の一を供給するようになった[56]。その裏には，製糸工場の女子教育のもとで，切磋琢磨して生産技術の上達を競いあった工女たちの姿があったのである。また，本稿で検討してきたようなキリスト教精神と企業経営の結びつきはまた，製糸業に続いて日本の近代化を支えた紡績業や化繊産業の分野にも継承された。

明治20年代になり，天皇家を中心とした国家神道が整備されていくにともない，ナショナリズムとキリスト教信仰の齟齬が顕在化するなかで，キリスト教精神に基づいた企業倫理に報徳思想が接ぎ木された。しかし，キリスト教精神と報徳思想の融合は，雇用者と被雇用者の関係すなわち労使関係の理想にも変化をもたらしたと考えられる。郡

是の波多野がキリスト教を企業経営に導入した際に強調したような「愛」に基づいた経営者と社員の父子関係が，報徳思想の強調する「孝」の精神にずらされてゆくことによって，労使間の主従関係に置き換えられていったからである。それは，キリスト教教育を基盤とした家庭思想が儒教的な倫理観に基づいた父権的な家族観と融合していったのと，ほぼ時期を同じくしていた。キリスト教の「家庭」が強調していた夫婦中心の家族が，夫唱婦随の夫婦関係と内助の功の美化へずらされてゆくなかで，「家庭」における夫と妻の間の権威関係は明確になる。近代製糸業に導入されたプロテスタンティズムの精神は，日露戦争から第一次世界大戦にかけてのナショナリズムの高揚を背景とした企業と家庭の国家への組み込みに伴って，封建的な儒教倫理に回収されることによって大衆に浸透していったということができよう。その一方で，キリスト教精神に基づいた社会運動として発生し，西欧諸国で労働組合の結成を促したキリスト教社会主義は，日本においては天皇制を批判する政治運動として位置づけられ，弾圧の対象とされていったのである。

本稿では，キリスト教の立場に基づいた労働問題や社会福祉への取り組みについてはほとんど触れなかったが，明治期のキリスト教が底辺の労働者層の救済に果たした役割もまた，今後さらに検討されねばなるまい。日本最初の孤児院を創設して孤児の救済に献身し，「児童福祉の父」といわれる石井十次は，後に高鍋製糸会社の社長となった。石井と彼の活動を生涯後援し続けた倉敷紡績社長の大原孫三郎は，ともに労働者の労働環境の改善に心を尽くした。そしてこの二人もまた，『聖書』とともに二宮尊徳の教えをまとめた『報徳記』から大きな影響を受けているのである。

注

1） 高橋 1995: 30-31。
2） 山脇 2002: 35, 37, 70-74。
3） 古田 1990: 197-198。
4） 当時のフランス向け糸は12デニールの細糸であったが，アメリカ向けは14デニールの太糸であった（中村 2003: 93）。
5） 中村 2003: 33-34. 93。
6） 金子 2002: 230-231。
7） 宮澤邦一郎 1988: i-ii。
8） 大濱 1995: 60-61。
9） 森 1998: 73-76。
10） 宮澤 1984: 51; 古田 1990: 202-203。
11） 群馬県における民権運動，廃娼運動，キリスト教，共同製糸業の結びつきについては，宮澤が詳しく歴史的な検証をしている（宮澤 1988）。
12） 宮澤 1984: 52。

13）群馬県立歴史博物館 1997: 23。
14）群馬県議会の議長として，中央政府の支配から自由な地方自治の県政の確立につとめ，さらに，群馬県を日本最初の廃娼県（First prefecture abolished licensed prostitution in Japan）とした中心的人物である。第一回国会議員にも選出されている。
15）宮澤 1984: 54。
16）宮澤 1988: 45–47。
17）村島渚 1940: 86–90。
18）山崎 2003: 15。
19）熊本バンドは，熊本藩洋学所の流れをくむ熊本英学校の生徒たちからなる。彼らは同志社英学校に入学し，日本組合基督教会の指導者となった（高橋 1995: 30）。
20）小深田 HP。
21）古田 1990: 200–201。
22）山田（貞）1979: 207–215。
23）杉浦 HP。
24）岡谷教会中部地区青年会 HP。
25）群馬県立歴史博物館 1997: 16。
26）山崎 1998: 21, 121–127, 129–132。
27）グンゼ株式会社 1996: 15–16, 55–56。
28）グンゼ株式会社 1996: 42–45。
29）グンゼ株式会社 1996: 75–78。
30）郡是株式会社 1960: 91–92, 141。
31）郡是株式会社 1960: 78–79，村島 1940: 160–167。
32）森 1998: 23–25, 214–215。
33）森の論考は，優良糸生産と普通糸生産の違いがもたらした生産形態の違いに注目した石井の研究を出発点としている（森 1998: ii，8）。
34）森 1998: 223–225, 279–281。
35）見城 HP。
36）村島渚 1940: 198–204。
37）郡是株式会社 1960: 81–83。
38）グンゼ株式会社 1996: 84–85。
39）宮澤 1988: 228–229。
40）宮澤 1988: 233–239。
41）中牧 2006: 14–20。
42）安丸 1999: 35。
43）安丸 1999: 61。
44）川村 1992: 1999–200。
45）中林 2003: 408–413。
46）グンゼ株式会社 1996: 79。
47）西川 2004: 76–77。
48）山田（智）2004: 60。
49）宮澤 1988: 164–165。
50）宮澤 1988: 167–169。

51） 西川 2000: 18-20，24-25。
52） 牟田 1996: 55-56。
53） 牟田 1996: 66-72。
54） 西川 2004: 78-82。
55） 牟田 1996: 183。
56） 金子 2002: 231。

文　献

石井寛治
　1972 『日本蚕糸業史分析』 東京大学出版会。
大濱哲也
　1995 「知識人とキリスト教」 別冊歴史読本事典シリーズ『日本「キリスト教」総覧』 新人物往来社。pp. 60-65。
金子晋右
　2002 「海洋アジアの地域間競争と世界市場――近代における日本・中国・インドの蚕糸業を中心に」 川勝平太編『グローバル・ヒストリーに向けて』 藤原書店。pp. 229-240。
川村望編
　1992 『日本資本主義と民間神道――諏訪の製糸業と諏訪大神信仰』 多賀出版。
グンゼ株式会社
　1996 『グンゼ100年史――1896-1996』 グンゼ株式会社。
郡是製糸株式会社
　1960 『郡是製糸株式会社六〇年史』 郡是製糸株式会社。
群馬県立歴史博物館
　1997 第57回企画展『二つの製糸工場――富岡製糸場と碓氷社』 群馬県立歴史博物館。
小山静子
　1999 『家庭の生成と女性の国民化』 勁草書房。
高橋昌郎
　1995 「近代日本とキリスト教」 別冊歴史読本事典シリーズ『日本「キリスト教」総覧』 新人物往来社。pp. 28-33。
中村真幸
　2003 『近代資本主義の組織――製糸業の発展における取引の統治と生産の構造』東京大学出版会。
西川祐子
　2000 『近代国家と家族モデル』 吉川弘文館。
　2004 『住まいと家族をめぐる物語――男の家，女の家，性別のない部屋』 集英社新書。
古田和子
　1990 「製糸技術の移転と社会構造――日本と中国の場合」 シリーズ世界史への問い『生活の技術 生産の技術』柴田三千雄他編，岩波書店。pp. 193-214。
宮澤邦一郎
　1984 「上毛蚕糸業者の思想と行動――協同組合製糸・自由民権・キリスト教」 地方史研究協議

会『地方史研究』34（4），pp. 51-55。
1988 『日本近代化の精神世界――明治期豪農層の軌跡』 雄山閣。
牟田一恵
1996 『戦略としての家族』 新曜社。
村島渚
1940 『波多野鶴吉翁伝』 郡是株式会社。
森芳三
1998 『羽前エキストラ格製糸業の生成』 お茶の水書房。
安丸良夫
1999 『日本の近代化と民衆思想』 平凡社。
山崎益吉
2003 『日本近代化を担った女性達 製糸工女のエートス』 日本経済新聞社。
山田貞光
1979 「相馬家の人たち――相馬愛蔵・国光を中心として」 同志社大学人文科学研究所編『松本平におけるキリスト教――井口喜源治と研成義塾』 同朋舎。
山田智子
2004 「郡是製糸株式会社における社寮の建築様式とキリスト教教育」『京都文教短期大学研究紀要』43，pp. 56-66。
山脇悌二郎
2002 『事典 絹と木綿の江戸時代』 吉川弘文館。

〈参照ホーム・ページ〉
岡谷教会中部地区青年会
http://www.nskk.org/province/youth/2000/service/28m.htm（2006/04/28）
小深田貞雄
http://www.jaipas.or.jp/118/118_05.htm（2006/04/25）
見城剃治 「近代日本の勤労倫理と報徳思想」
http://home.kanto-gakuin.ac.jp/~be02/nivvyuu-kenjo.html（2006/05/19）
杉浦幹雄
http://www.tranzas.ne.jp/~smikio/suwa.html（2006/04/28）